

ミルワード神父様が健康を回復され、2015年5月16日より森永エンゼル財団主催の「ミルワード神父のシェイクスピア物語」が始まり、6月16日に四回目を終了いたしました。本日は、後期の第一回目、通算いたしますと第五回の講座でございます。

第四回目を大まかに振り返りますと、第一部のご講演では第三回のイングランドにおける宗教論争に関する追加プリントを用いて、イングランドにおける宗教論争の推移を五項目に分けて丁寧にご説明下さいました。次に、シェイクスピアと聖書との関連に関して、シェイクスピアの学んだ学問等にかかわる御本を次々出版され、2013年出版の *Was Shakespeare a Catholic?* においてシェイクスピアがカトリックであったと指摘されました。出版された多数の御本の内容紹介の中で、2012年に出版された *Pattern in Shakespeare's Carpet* のタイトルが端的に示すように、絨毯は全体を見ないと模様が分らないのと同じく、シェイクスピアの深い意味を理解するにはシェイクスピアの全ての劇を読まなければ、シェイクスピアの織り上げた模様は分からないのだとの含蓄のあるお言葉を伺いました。更に、シェイクスピアの劇団の同僚が、第一・二つ折り本の劇の分類を喜劇、悲劇、歴史劇としたのは間違いあり、劇の内容から分類すると喜劇、悲劇、悲喜劇 (tragi-comedy) と分類すべきだったと述べられました。神父様は、シェイクスピアの最後の時期に当たる“tragi-comedy”に言及されました。その一例を挙げますと、『ペリクリーズ』でペリクリーズがマリナーナに語りかける台詞には聖務日課の「救い主のうるわしき母」の箇所が響いていると説明下さいました。*Shakespeare's Other World* では主に三つの劇を取り上げられ、『ハムレット』では質問と疑問が問題であり、『リア王』では説教、『テンペスト』では瞑想が取り上げられているとの解釈を披露下さいました。この点に関しては、秋の講座で詳しくご説明くださることでしょう。

第二部の対談では、1972年にミルワード神父様のベスト・セラーの印税をルネッサンス基金として活用され、ルネッサンス研究所を創立されたこと、その研究所が活発な研究活動のベースであったこととお話しになりました。残念なことに、神父様の御病気に伴って、2015年3月ルネッサンス研究所は惜しまれつつ閉鎖されました。幸い研究所の活動の一部を森永エンゼル財団が継承してくださり、現在の「ミルワード神父のシェイクスピア物語」連続講座に引き継がれた経緯をご説明下さいました。

次に、シェイクスピアの宗教的背景の研究は長い間、研究対象として重視されてこなかったけれども、1990年代に入りシェイクスピアと宗教の問題が取り上げられるようになった理由を伺ったところ、1993年に Eamon Duffy 教授が、従来のプロテスタント解釈による英国史解釈を見直す修正主義を提唱し、Duffy 教授のおかげで新しい目で“Tudor”朝の宗教を考えるようになり、以後、二十年間、ヘンリー八世の時代の宗教が“hot topic”になったとのご説明を頂きました。フランシス・ベーコンは新しい科学を標榜するプロテスタントの代表的な存在とするならば、中世への憧れを描くシェイクスピアはカトリック的な立場を示すと説明して下さいました。フロアーから、「シェイクスピアが他の時代、例えばヴィクトリア朝に生きていたと仮定すると、その時代においてもシェイクスピアの才能を発揮できたでしょうか」とのご質問に対し、1590年から1610年という激動の時代においてこそ、シェイクスピアは彼の才能を発揮できたとお答え下さいました。

最後に *Pericles* の第五幕第一場で、*Pericles* が娘 Marina と再会した喜びを表すセリフ“Give me a gash, put me to present pain,...”を朗読後、神父様への感謝の拍手で前期が終了致しました。